報　告

看護系大学における看護学生の日常生活援助技術習得への意欲に関連する要因

Factors related to motivation to learn daily life assistance technology of nursing students in college.

小林由起子，冨田幸江

Yukiko Kobayashi，Sachie Tomita

キーワード：看護学生，日常生活援助技術習得
Key words：nursing student，daily living assistance technology learning

要　旨

本研究は，看護系大学 2 年生を対象に，看護学生の日常生活援助技術習得への意欲に関連する要因を明らかにした．解析対象は 284 名であった．調査内容は，個人属性，生活習慣，日常生活援助技術習得への取り組み方，日常生活援助技術習得への意欲をもつきっかけや出来事の有無，達成動機とし，日常生活援助技術習得への意欲の関連要因を明らかにするために，多重ロジスティック回帰分析を実施した（$p<0.05$）．その結果，日常生活援助技術習得への意欲に関連する要因は，食事は 3 食食べていること（オッズ比 2.94 倍），技術練習を教員に確認してもらうこと（オッズ比 1.59 倍），日常生活援助技術習得への意欲をもったきっかけや出来事があること（オッズ比 2.15 倍）であった．教員は，学生の食生活を含めた生活習慣を整えることへの働きかけや，患者に日常生活援助技術を提供することの意味や価値など，学生が看護技術に意欲がもてるきっかけを作ることで，日常生活援助技術の習得への意欲を高めると考えられる．

Ⅰ．はじめに

基礎看護学において，看護学生（以下，学生）は，看護学の基礎となる知識，技術，態度を身につけ，専門看護学領域への学びにつなげることが重要である（服部，2008）．基礎看護学の中核には看護技術教育があり，その中でも，看護の独自性が最も発揮される日常生活援助技術（以下，生活援助技術）を，学生が習得することは重要である．

基礎看護技術という科目において，学生は，健康問題を生じた対象の日常生活に関心を寄せその習慣をよく知り，その対象に合わせて生活援助技術を提供することを学習する．しかし，1980 年代から，少子高齢化，核家族化，生活の電化など社会の変化に伴い，かつては生活の中で自然に身につき，習慣化されていた日常生活行動が身についていないなど，学生の質の変化について，

受付日：2015 年 9 月 30 日　　受理日：2016 年 1 月 25 日
埼玉医科大学保健医療学部看護学科

複数報告されている（菱沼ら , 2011: 大橋ら , 2008: 萩原ら , 2004: 氏家ら , 1983）．なかでも，タオルを絞ることや靴ひもを結ぶことができないことが，患者に生活援助を提供する際に影響をおよぼしている（野々村ら , 1989）．このような状況の学生が，看護において，生活援助技術の大切さを認識し，意欲的に技術習得に取り組んでいけるようかかわることが，基礎看護学において，看護技術教育を担う教員の課題である．

学生の基礎看護技術の習得に関する研究は，2000 年以降に多くなされている．学生が主体的に基礎看護技術を学ぶための授業内容に関する研究（伊藤ら , 2008）では，学生自身が予習をすることなど，主体的な学習に基づいた演習を行うことで，学生が看護技術に対して興味・関心を持ち，看護技術習得への動機づけになったことを報告している．有住ら（2006）は，ベッドメーキングの技術練習に意欲的に取り組んでいた学生にインタビューを行った結果，意欲的に技術練習に取り組む要因として，患者に質の高い看護技術を提供したいという学生の思いがあることを明らかにしている．このように，意欲とは，患者のために何かをしたいという気持ちや看護援助への興味・関心など，学生の内面に育まれるものである．梶田（2003）は，学習成果にしても，人間的な成長の姿にしても，その核心部分は興味・関心など，その人の内面にあると述べている．そして，物事への追及・探求への姿勢や取り組み方といった関心や意欲は，学生の学習行動の基礎となるため，それらを育むことが教育において大切であること示唆している．

以上のことから，教員が学生の生活援助技術習得を支援するためには，生活援助技術を習得したいという学生の意欲を育むことが大切であると考える．しかし，学生の生活援助技術習得への意欲やその要因を明らかにした研究報告はほとんどみられない．そこで，看護系大学における看護学生の生活援助技術習得への意欲に関する要因を明らかにしたいと考え，本研究に取り組んだ．

Ⅱ．研究目的

看護系大学における看護学生の日常生活援助技術習得への意欲に関連する要因を明らかにする．

Ⅲ．本研究の概念枠組み（図 1）

本研究の研究枠組みについて，文献検討をはじめ，研究者らのブレインストーミング，研究者の経験などから，生活援助技術習得への意欲の関連要因を検討した．その結果，生活援助技術習得への意欲の関連要因は，個人属性，生活習慣，生活援助技術習得への取り組み方，生活援助技術習得への意欲をもつきっかけや出来事，達成動機からなると考えた．

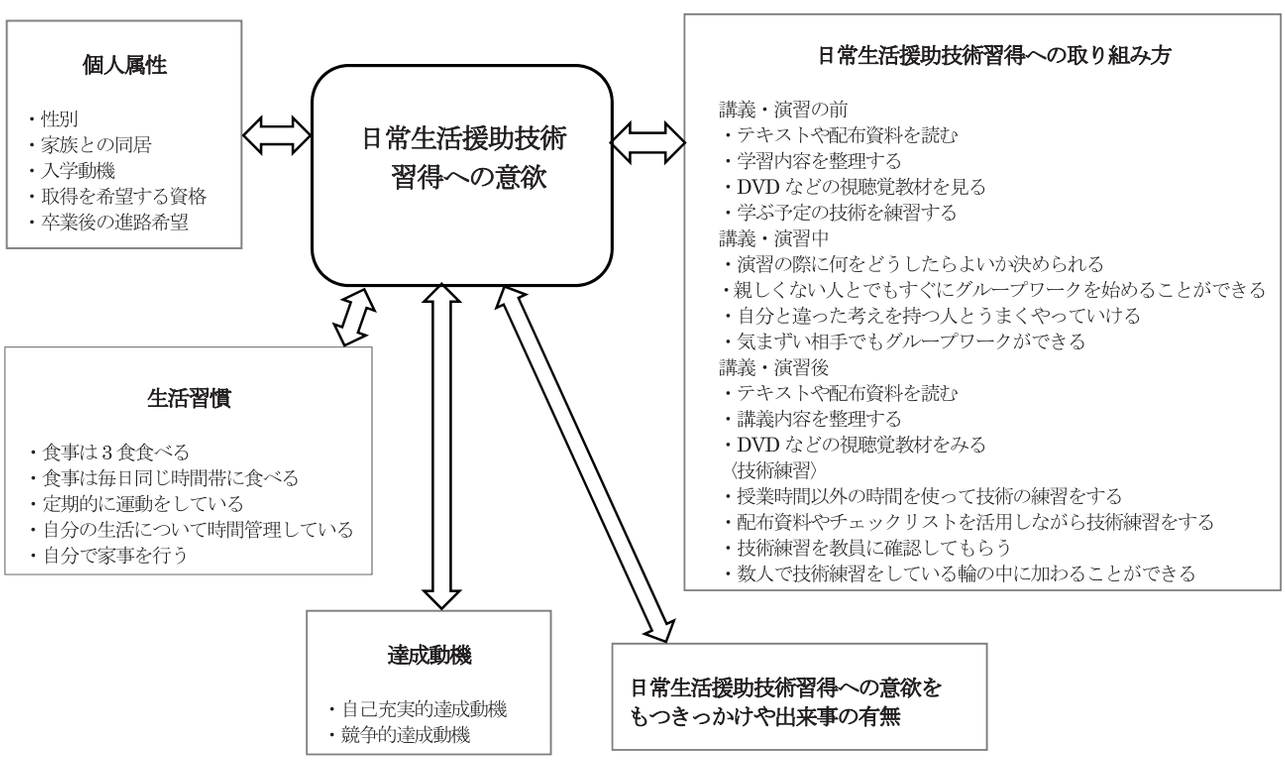

図 1　本研究の概念枠組み

Ⅳ．用語の定義

1. 日常生活援助技術習得

日常生活援助技術は，清潔，食事，排泄，運動などの日常生活行動を援助する技術であり，看護の独自の機能として，患者に提供されるものである．そのために，対象に安全・安楽・自立を目指した目的と根拠をもった技術を習得することを指す．

2. 意欲

自分自身が価値あるものとみなしている物事を成し遂げようと，進んで何かをしようと思うこと．また，興味・関心などの内面をいう（梶田 , 2003）．

Ⅴ．研究方法

1. 調査対象

関東圏の看護系大学のうち，調査協力の得られた 8 大学の 2 年生学生数 824 人とした．

2. 調査方法

1）関東圏における全ての看護系大学 57 校の学科長宛てに，研究協力依頼文書，研究承諾書，調査用紙を返信用封筒とともに送付し研究協力を依頼した．本研究の母集団は看護系大学 2 年生の学生である．関東圏の看護系大学 2 年生の学生をサンプルとして抽出することで，母集団を想定できると考え，関東圏の看護系大学を選択した．なお，返送方法については，留置き法または郵送法どちらかを大学に選択してもらった．依頼後，承諾が得られた大学に対し，対象学生分の研究協力依頼書，調査用紙，返信用封筒を郵送し配布を依頼した．調査用紙は，留置き法および郵送法により返信された．

2）調査期間

2014 年 7 月～ 10 月

3）調査内容

本研究は，自記式質問紙により以下の内容で構成した．

個人属性は，年齢，性別，家族と同居の有無，入学動機，取得を希望する資格，卒業後の進路とした．生活習慣についての質問は，食事，運動，時間管理，家事に関する内容とした．あてはまる，少しあてはまる，あまりあてはまらない，あてはまらない，の 4 件法で回答を求めた．生活援助技術習得への取り組み方は，生活援助技術の講義・演習前の取り組み，講義・演習中の取り組み，講義・演習終了後の取り組み，技術練習の取り組みに関する内容とした．あてはまる，少しあてはまる，あまりあてはまらない，あてはまらない，の 4 件法で回答を求めた．生活援助技術習得への意欲をもつきっかけや出来事については，きっかけや出来事の有無として回答を求めた．達成動機は，達成動機測定尺度を使用し，非常にあてはまる～全然あてはまらないまでの 7 件法とした．本研究で用いた達成動機測定尺度は，堀野（1987）, 堀野ら（1991）によって作成されたものである．この尺度は，他人との比較や競争あるいは社会的な名誉や地位に基準をおいて達成を求めようとする競争的達成動機 10 項目と，他人との競争や社会的な評価基準にはとらわれず，自分の個性的な充実感に基準をおいて物事に取り組もうとする自己充実的達成動機 13 項目の下位概念から構成されている（門間ら , 2002）．全然あてはまらないを 1 点，非常にあてはまるを 7 点とし，2 下位概念それぞれの合計点数を算出し，分析する尺度である．生活援助技術習得への意欲については，Visual Analog Scale（以下，VAS）で回答を求めた．VAS は，「全く感じない：0 mm」～「非常に感じる：100 mm」として記入を求めた．

3. データの分析方法

記述統計により，各変数の度数・平均値・標準偏差を算出した．生活援助技術習得への意欲を高い群，低い群の 2 群に分類した．なお，意欲が高い学生の特徴を明らかにするために，4 分割として上位 1/4 を意欲が高い群とした．

生活援助技術習得への意欲と要因との有意差の有無については，χ^2 検定を実施した（$p<0.05$）．χ^2 検定にあたり，生活習慣，生活援助技術習得への取り組み方については，あてはまると少しあてはまる者を「あてはまる」，あまりあてはまらないとあてはまらない者を「あてはまらない」の 2 値とした．達成動機については，自己充実的達成動機 13 項目と競争的達成動機 10 項目のそれぞれの合計値，平均値を算出し，平均値を境に高い群，低い群の 2 値とした．

生活援助技術習得への意欲に関連する要因を明らかにするために，生活援助技術習得への意欲を従属変数に，χ^2 検定により有意水準 0.1 未満の変数を説明変数とし，多重ロジスティック回帰分析を実施した（$p<0.05$）．対馬（2015）は，「有効な独立変数であっても，他の変数を増減させると p 値または f 値が変化するので，有意水準は少し高めに設定しておく．」と述べていることから，有意水準 0.1 未満の変数を説明変数とした．

統計処理には，統計解析ソフト（SPSS Statistic22.0）を使用した．

4. 倫理的配慮

本研究を行うにあたり，埼玉医科大学保健医療学部倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：110）．対象の大学には調査の主旨を文書にて説明し，学科長の許可を得た．研究対象者に対し，調査への協力は自由意志によること，個人情報を保護すること，データの取り

扱いには細心の注意を払うこと，得られたデータは研究目的以外には使用しないことを文書で説明した．なお，本研究に関して開示すべき COI はない．

Ⅵ．結果

対象者 824 人のうち，318 人（回収率 38.6%）より回答が得られた．

318 人のうち，高校卒業後ストレートで入学した学生のみを対象とし，21 歳以上の者（16 人）は，日常生活等の社会的背景因子に差があると考えられるので除外した．また，目的変数である生活援助技術習得への意欲の回答に欠損がない者 284 人（有効回答率 89.3%）を解析対象とした．

1．生活援助技術習得への意欲

生活援助技術習得への意欲の平均値は，74.3 mm（SD ± 19.0）であった．意欲の高い学生の特徴を明らかにするために 4 分割した．4 分割の上位 1/4 は 88mm であった．したがって，88 mm 以上の 73 名を意欲が高い群，87 mm 以下の 211 人を意欲が低い群とした．

2．2 変量解析の結果（表 1）

1）個人属性

性別，家族との同居，入学動機，取得を希望する資格，卒業後の進路希望については有意な差はみられなかった．

2）生活習慣

食事は 3 食食べている，定期的に運動している，自分の生活について時間管理している，家事を行っているについて有意差がみられた（$p<0.05$）．

3）生活援助技術習得への取り組み方

生活援助技術習得への取り組み方については，有意な差はみられなかった．

4）生活援助技術習得への意欲をもつきっかけや出来事

生活援助技術習得への意欲をもつきっかけや出来事の有無については，約 4 割の者が，意欲をもつきっかけや出来事を経験しており，有意差がみられた（$p<0.05$）．

5）達成動機

自己充実的達成動機の平均値は，71.4（SD ± 10.29）であった．これらを 2 値として検定の結果，高い群に有意な差がみられた（$p<0.05$）．競争的達成動機の平均値は，41.8（SD ± 7.41）であった．これらを 2 値として検定の結果，有意な差はみられなかった．

3．多重ロジスティック回帰分析の結果（表 2）

学生の生活援助技術習得への意欲に関連する要因について，多重ロジスティック回帰分析を行った結果，食事は 3 食食べている（オッズ比 2.94），技術練習を教員に確認してもらう（オッズ比 1.59），生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事がある（オッズ比 2.15）であった．

Ⅶ．考察

本研究において，多重ロジスティック回帰分析による学生の生活援助技術習得への意欲に関連した要因は，食事は 3 食食べている，技術練習を教員に確認してもらう，生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事があるであった．以下に，これら関連要因について考察する．

1. 生活援助技術習得への意欲と食事を 3 食食べていることとの関連

食事を 3 食食べている者は，食べていない者に比べ，2.94 倍，生活援助技術習得への意欲が高かった．学生が成長する過程で獲得した生活習慣は，学生の生活援助技術の習得に影響をおよぼすことについての研究（服部ら , 2008）はみられるが，食事を 3 食食べる生活習慣がある者は，生活援助技術習得への意欲が高いことについての先行研究は見当たらなかった．このことから，この結果は，本研究の特徴といえる．

平成 17 年度から，小中学校に食の指導をする栄養教諭制度が創設された（文部科学省 , 2005）．この制度は，健康に生活していけるよう，正しい知識に基づいて，食をコントロールしていく「食の自己管理能力」や「望ましい食習慣」を身につけることである．橋本ら（2012）は，小学生を対象にした研究で，食事をきちんととることが，学習意欲に影響すると報告している．食事は，活動のためのエネルギーとなり，物事に関心を持ち価値あるものと感じ取る力や，物事を成し遂げようとする，いわゆる意欲という心の働きにつながることを報告している．このように，食事を 3 食きちんと食べること，いわゆる，望ましい食習慣は，心身の健康に大きく影響し，より健康に生活していくための自己管理能力や自己実現の欲求と関連している（A.H. マズロー ,1987）．本研究の生活習慣に関する 5 つの調査項目のなかで，食事を 3 食食べることは，人が生きていく上で最も基本的な生活習慣についての調査項目である．そして，食事を 3 食食べること，いわゆる，望ましい食習慣が身についていることは，他の生活習慣の確立につながると考える．

これらのことから，学生の学習意欲，つまり，生活援助技術習得への意欲が高まるためにも，食生活を含めた生活習慣を整えることへの教員の働きかけが大切である．教員は，学生が自らの生活習慣を振り返り，生活習慣のあり方が，人の心身の健康に大きく影響を及ぼすこ

表1　日常生活援助技術習得への意欲と対象者の特性

N=284

項目		総数	意欲が高い n	意欲が高い %	意欲が低い n	意欲が低い %	
日常生活援助技術習得への意欲		284	73	25.7	211	74.3	
個人属性							
対象者の性別	男	35	9	25.7	26	74.3	
	女	249	64	25.7	185	74.3	
家族との同居	あてはまる	206	49	23.8	157	76.2	
	あてはまらない	78	24	30.8	54	69.2	
〈入学動機〉							
看護師の資格をもちたい	あてはまる	213	57	26.8	156	73.2	
	あてはまらない	71	16	22.5	55	77.5	
家族や知人の勧め	あてはまる	22	3	13.6	19	86.4	
	あてはまらない	262	70	26.7	192	73.3	
家族や身近な人に看護師がおりその人への憧れ	あてはまる	40	9	22.5	31	77.5	
	あてはまらない	244	64	26.2	180	73.8	
家族や知人に看護を必要としている人がいる	あてはまる	5	3	60.0	2	40.0	†
	あてはまらない	279	70	25.1	209	74.9	
ドラマや報道などテレビ・マスコミの影響	あてはまる	8	3	37.5	5	62.5	
	あてはまらない	276	70	25.4	206	74.6	
〈取得を希望する資格〉							
看護師	あてはまる	247	65	26.3	182	73.7	
	あてはまらない	37	8	21.6	29	78.4	
保健師	あてはまる	63	18	28.6	45	71.4	
	あてはまらない	221	55	24.9	166	75.1	
助産師	あてはまる	26	7	26.9	19	73.1	
	あてはまらない	258	66	25.9	192	74.4	
養護教諭	あてはまる	11	2	18.2	9	81.8	
	あてはまらない	272	70	25.7	202	74.3	
〈卒業後の進路希望〉							
看護職（看護師・保健師・助産師）として働きたい	あてはまる	267	66	24.7	201	75.3	
	あてはまらない	17	7	9.6	10	58.8	
看護系の大学院に進学したい	あてはまる	11	5	45.5	6	54.5	
	あてはまらない	273	68	24.9	205	75.1	
看護系以外の仕事に就きたい	あてはまる	6	2	33.3	4	66.7	
	あてはまらない	278	71	25.5	207	74.5	
生活習慣							
食事は3食食べている	あてはまる	225	65	28.9	160	71.1	*
	あてはまらない	59	8	13.6	51	86.4	
食事は毎日同じ時間帯に食べている	あてはまる	158	46	29.1	112	70.9	
	あてはまらない	126	27	21.4	99	78.6	
定期的に運動をしている	あてはまる	117	39	33.3	78	66.7	*
	あてはまらない	167	34	20.4	133	79.6	
自分の生活について時間管理している	あてはまる	132	42	31.3	90	68.2	*
	あてはまらない	152	31	20.4	121	79.6	
家事を行っている	あてはまる	170	53	31.2	117	68.8	*
	あてはまらない	114	20	17.5	94	82.5	
日常生活援助技術習得への取り組み方							
〈講義・演習の前〉							
テキストや配布資料を読む	あてはまる	201	53	26.4	148	73.6	
	あてはまらない	83	20	24.1	63	75.9	
学習内容を整理する	あてはまる	167	43	25.7	124	74.3	
	あてはまらない	117	30	25.6	87	74.4	
DVDなどの視聴覚教材をみる	あてはまる	66	15	22.7	51	77.3	
	あてはまらない	218	58	26.6	160	73.4	
学ぶ予定の技術を練習する	あてはまる	87	19	21.8	68	78.2	
	あてはまらない	197	54	27.4	143	72.6	
〈講義・演習中〉							
演習の際、何をどうしたらよいかを決めることができる	あてはまる	196	50	25.5	146	74.5	
	あてはまらない	88	23	26.1	65	73.9	
親しくない人とでもすぐにグループワークを始めることができる	あてはまる	234	62	26.5	172	73.5	
	あてはまらない	50	11	22.0	39	78.0	
自分と違った考えをもっている人とでもうまくやっていける	あてはまる	238	66	27.7	172	72.3	†
	あてはまらない	46	7	15.2	39	84.8	
気まずいことがあった人とでもうまくやっていける	あてはまる	227	63	27.8	164	72.2	
	あてはまらない	57	10	17.5	47	82.5	
〈講義･演習後〉							
テキストや配布資料を読む	あてはまる	224	59	26.3	165	73.7	
	あてはまらない	60	14	23.3	46	76.7	
講義・演習内容を整理する	あてはまる	198	54	27.3	144	72.7	
	あてはまらない	86	19	22.1	67	77.9	
DVDなどの視聴覚教材をみる	あてはまる	48	12	25	36	75.0	
	あてはまらない	236	61	25.8	175	74.2	
〈技術練習〉							
授業時間以外の時間を使って技術練習をする	あてはまる	218	62	28.4	156	71.6	†
	あてはまらない	66	11	16.7	55	83.3	
配布資料やテキストを活用しながら技術練習する	あてはまる	238	66	27.0	178	73.0	
	あてはまらない	46	7	17.5	33	82.5	
技術練習を教員に確認してもらう	あてはまる	238	66	27.7	172	72.3	†
	あてはまらない	46	7	15.2	39	84.8	
数人で技術練習している輪の中に加わることができる	あてはまる	214	56	26.2	158	73.8	
	あてはまらない	70	17	24.3	53	75.7	
日常生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけ	あり	117	41	35.0	76	65.0	*
	なし	167	32	19.2	135	80.8	
達成動機							
自己充実的達成動機	高い	150	51	34.0	99	66.0	*
	低い	134	22	16.4	112	83.6	
競争的達成動機	高い	149	45	30.2	104	69.8	†
	低い	135	28	20.7	107	79.3	

χ^2検定，†：p<0.1，　*：p<0.05

表2　多重ロジスティック回帰分析による看護系大学における看護学生の日常生活援助技術習得の意欲に関連する要因

N=284

項目		オッズ比	95%信頼区間 下限		上限	
食事は3食食べている	あてはまらない	1				
	あてはまる	2.94	1.22	－	7.08	＊
技術練習を教員に確認してもらう	あてはまらない	1				
	あてはまる	1.59	1.01	－	2.51	＊
日常生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけがある	あてはまらない	1				
	あてはまる	2.15	1.19	－	3.9	＊

＊：$p<0.05$

とについて考えることができるような講義・演習の内容を検討する必要がある．

2. 生活援助技術習得への意欲と技術練習における教員からの確認との関連

技術練習を教員に確認してもらう者は，確認してもらわない者に比べ，1.59 倍生活援助技術習得への意欲が高かった．

学生にとって技術練習は，技術の習得過程であり，「知る段階」「身につける段階」「使う段階」としてのプロセスを踏むことが大切である．講義を通して，「知る段階」で得た技術のポイントを正確に練習することで，その行為の意味や根拠をつかみ，「身につける段階」となる（薄井 ,1997）．特に，この「身につける段階」において，教員による学生の技術習得に対する確認は重要であり，学生も教員の技術の確認によって，原則に沿った根拠のある技術が身につくと考える．また，学生の技術練習において，教員は，学生の技術の習得状況をありのままにとらえ，できているところは認め，励ましながら技術を指導したり確認したりすることは，学生の意欲を高める重要な教育的かかわりである（藤岡 ,1998）．

本研究結果においても，このように，学生が，教員の指導によって，技術の確認を受けることで，技術に興味や関心がもて，生活援助技術習得への意欲の高まりにつながったと推察できる．

3. 生活援助技術習得への意欲と生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事との関連

生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事がある者は，ない者に比べ，2.15 倍，生活援助技術習得への意欲が高かった．これらに関する先行研究は見当たらず，本研究の結果から，生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事がある学生は,生活援助技術習得への意欲が高まったと推察できる．

梶田（2003）は，学習への意欲は，学生が何をどのように感じるのか，そして，そのことから，どのように心が動くのかという内的促しによって，導かれると述べている．本研究対象者においても，生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事があると答えた学生は，その体験によって，心が動かされ，その心の動きが動機づけとなり，生活援助技術習得に向けての意欲につながったと考えられる．

教員は，生活援助技術の授業，技術練習等の場面を通して，学生一人ひとりの看護への思いや気づきを大切にしつつ，学生の心が看護を学ぶことに対して，どのように動いているのかをとらえ，患者にとっての生活援助技術の意味・価値について，考えることができるようなきっかけを作ることが大切である．このようなかかわりを通して，教員は，生活援助技術が看護独自の機能であることについて学生に語り，学生にとってのロールモデルとしての存在となり，生活援助技術を習得したいという学生の意欲を育んでいくことが重要である．

Ⅷ. 結論

看護系大学の学生の生活援助技術習得への意欲に関連する要因は，食事は３食食べている，技術練習を教員に確認してもらう，生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけや出来事があることであった．

この結果から，食事を３食きちんと食べることは，物事に関心を持ち，物事を成し遂げようとする，いわゆる意欲という心の働きにつながるといえる．生活習慣を整えることが学習意欲いわゆる生活援助技術習得への意欲を高めると考えられるため，教員は，学生が自らの生活習慣を整えることができるよう働きかけることが大切である．

また，技術練習を教員に確認してもらうことが，生活援助技術習得への意欲に関連していた．教員は，技術の練習において，看護技術のポイントを指導することや学生の技術ができていることを認めたり，励ましたりすることで，学生の生活援助技術習得への意欲を高めることになると考えられる．さらに，生活援助技術習得の意

欲に，生活援助技術習得への意欲をもったきっかけや出来事があることが関連していた．教員は，患者にとっての生活援助技術を提供することの意味や価値について，学生が考えるきっかけを作ることで，学生が生活援助技術の習得への意欲を高めると考えられる．

Ⅸ．本研究の限界と課題

本研究は，対象人数が 284 名であることから，学生の生活援助技術習得への意欲に関連する要因を明らかにするためには限界があると考える．今後は，対象数を増やし，さらにこれらについて追求していきたい．また，生活援助技術習得に向けてやる気になったきっかけの内容については，質的研究も含めてさらに検討を重ねていく必要がある．

なお，本研究は，平成 25 年度埼玉医科大学保健医療学部プロジェクト研究の一部である．

謝　辞

本研究の趣旨をご理解いただき，ご協力くださいました看護系大学の学科長，教員の皆様ならびに学生の皆様に心より感謝いたします．

文　献

A.H. マズロー（1987）/ 小口忠彦：人間性の心理学（改訂新版），産業能率大学出版部 , 東京.

有住優子 , 青木久恵 , 小西小夜子 , 他 2 名（2006）: 看護学生の基礎看護技術の技術練習行動を促進する要因－ベッドメーキングの技術練習－ , 九州国立看護教育紀要 , **9**（1）, 15-19.

藤岡完治（1998）: 看護教員のための授業設計ワークブック（第 1 版）, 医学書院 , 東京.

萩原美紀 , 山本真紀子 , 矢野恵子（2004）: 臨地実習前の看護学生の生活体験に関する実態調査 , 三重看護学誌 , **6**, 91-96.

橋本和幸 , 三沢元彦（2012）: 小学生の睡眠習慣および食事習慣と学力との関連・小学生の睡眠・食事習慣と学力との , 了徳寺大学紀要 , **6**, 37-50.

服部容子 , 吾妻知美（2008）: 看護学科新入生の入学動機と生活習慣に関する調査－「生活援助技術」の授業内容の検討－ , 甲南女子大学研究紀要看護学・リハビリテーション学編 創刊号 , 61-71.

菱沼典子 , 佐居由美 , 大久保暢子 , 他 6 名（2011）: 看護系大学 1 年生の生活習慣と生活体験に関する全国調査 , 聖路加看護学会誌 , **15**（1）, 27-34.

堀野みどり（1987）: 達成動機の構成因子の分析－達成動機の概念の再検討－ , 教育心理学研究 ,**35**（2）,148-154.

堀野みどり , 森和代（1991）: 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 , 教育心理学研究 , **39**, 308-315.

伊藤綾子 , 駿河絵理子 , 藤井美和（2008）: 基礎看護技術の主体的な学習法に対する学生の反応－看護技術の演習方法の変化と技術習得過程における動機付けとの関連－ , 東京医療保健大学紀要 , **1**, 29-35.

門間晶子 , 臼井みどり（2002）: 達成動機研究の概観と看護領域の応用の検討－健康教育対象者および看護者自身の動機づけの側面から－ , 名古屋市立大学看護学部紀要 , **2**, 21-28.

梶田叡一（2003）: 教育評価－学びと育ちの確かめ－（第 1 版）, 放送大学教育振興会 , 東京.

文部科学省（2005）: 栄養教諭制度の概要 , （http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/eiyou/04111101/003.htm 2015.9.20）

野々村典子 , 中川克子（1989）: 看護系大学生の日常における趣旨の動きと家事経験 , 日本看護学会論文集 第 20 回看護教育 , **20**, 240-242.

大橋久美子 , 菱沼典子 , 佐居由美 , 他 3 名（2008）: 看護大学入学生の生活体験 , 聖路加看護学会誌 , **12**（2）, 25-32.

対馬栄輝（2015）: SPSS で学ぶ医療系多変量データ解析（第 9 版）, 東京図書株式会社 , 東京.

氏家幸子 , 阿曽洋子（1983）: 学生の入学時の生活関連動作と看護実習の実態 , 日本看護学会論文集 第 14 回看護教育 , **14**, 281-284.

薄井坦子 , 小玉香津子（1997）: 系統看護学講座 専門 2 基礎看護学 **2**（第 12 版）, 医学書院 , 東京.